

鴨 東 通 信

冬

2011.1 No.80



●知られざるライバル②

堀内素堂と伊東救庵

海原 亮

●てーたいむ

座談会 京都専門書出版社の現在と未来

京都大学学術出版会×人文書院×法藏館×思文閣出版

●エッセイ

五代史とわたし

山崎寛士

薔薇と桜

増田裕美子

●リレー連載 世界のなかの日本研究5

海外からみた日本の中世村落

原田信男

●史料探訪

光明皇后発願 出曜経 巻第四

松永和浩



江戸末期折衷派の儒者、広瀬旭莊(文化4・1807-文久3・1863)の全集の1冊として、同時代清の文人・愈曲園に「東国詩人の冠」と評されるほどであったその詩業・文筆活動を集成。

岡村繁・井上敏幸編【最新刊】

広瀬旭莊全集 詩文篇

(全一卷)

詩集 影印篇

広瀬先賢文庫(大分県日田市)所蔵の善本を影印(写真版)で掲載

梅墩詩鈔 初〜四篇

梅墩詩鈔 五篇

梅墩 七篇

東遊稿

西遊紀行

梅墩詩鈔拾遺(新編) 岡村繁編

影印篇からもれた詩篇を、現在残存する諸種の写本や刊本の中から搜集編纂(活字組)

旭莊文集(新編) 井上敏幸編

旭莊が他書に寄せた序や跋から墓誌銘にいたるまで、旭莊が残した文を集成(活字組)

解説

井上敏幸

▼B5判・八六二頁/定価三一、五〇〇円

広瀬旭莊全集

既刊11冊

日記篇(日間瑣事備忘)(全9巻) 多治比郁夫編

第1巻(天保3年6月〜天保11年7月) 定価一四、七〇〇円

第2巻(天保11年7月〜天保15年7月) 定価一三、六五〇円

第3巻(天保15年7月〜嘉永2年4月) 定価一四、七〇〇円

第4巻(嘉永2年4月〜嘉永5年8月) 定価一四、七〇〇円

第5巻(嘉永5年8月〜安政2年2月) 定価一五、二二五円

第6巻(安政2年2月〜安政5年2月) 定価一五、二二五円

第7巻(安政5年2月〜万延元年3月) 定価一六、二七五円

第8巻(万延元年4月〜文久2年4月) 定価一四、七〇〇円

第9巻(文久2年5月〜文久3年8月) 定価一四、七〇〇円

詩文篇(全1巻) 岡村繁・井上敏幸編

隨筆篇(全1巻) 中野三敏編

※以下は未刊・刊行時期未定

書簡・伝記資料篇(全1巻) 中村幸彦・中野三敏編

定価一五、二二五円

藤村庸軒をめぐる人々

白奇頭成著

藤村庸軒は、儒者・儒学者であり、漢学・和学にわたる広い教養で、漢詩・和歌・作庭・花道・茶具の製作に才能を発揮した。その交流も多岐にわたり、今なお様々な面から庸軒に関する資料が発見されている。本書は、一族の人々・門弟達・儒教の師・茶道の師・友人の儒者・医師達の事蹟をたどること、現在も続いている庸軒流の開祖、藤村庸軒の実態について新たな角度からのアプローチを試みる。巻末には「庸軒流茶道系譜」を収録。

【内容】
三宅亡羊(漢学の師)
千宗旦(茶道の師)
藤村恕堂(庸軒長男)
藤村正員(庸軒三男)
久須見疎安(庸軒娘婿)
北村幽安(庸軒門弟)
山本退庵(庸軒の門人)
大文字屋宗積(庸軒縁戚)
有馬凉及(庸軒の友人)
田屋横井等怡(庸軒の義父)
庸軒流茶道系譜

【2月上旬刊】

▼A5判・七八二頁/定価一七、三二五円

賢君上杉鷹山^{とうげん}の治世下、出羽国米沢藩では、積極的な洋学振興が実現した。堀内素堂（享和元年生まれ）は、藩医家の逸材として二〇代早くから江戸で仕官し、杉田成卿・青地林宗の門に学びつつ、当地の蘭学者たちと広く交わった。

素堂より三歳年少にあたる伊東救庵も二〇歳で江戸へ遊学する。代々同家は眼科が家業であったから、高名な幕府医官土生玄碩^{はぶげんせき}に入門を果たした。

救庵は、西洋の技術に接しながらも自身で原書を翻訳することは難しいと考えていた。そんな彼に素堂は「親シク彼書ニ就テ読ハ天生ノ花卉ノ如シ色澤芳香更ニ自然ノ妙趣アリ」（救庵「西遊雜記」）と述べ、原典に学ぶ重要性を説き、蘭語修得を懇誠に勧める。

文政九年（一八二六）シーボルトの江戸参府時、救庵は師玄碩の代わりに長崎まで随行し、西洋眼科術の蘊奥^{うんごう}を学ぶよう託された。思いがけぬ機会到来である。だが救庵は米沢で待つ父昇^{しやう}廼^なを想い、これを請けるべきか躊躇した。

このとき素堂は、西洋の治療術を間近に観察できる絶好の機会を逸すべきでない、なぜ速断しないのか、と救庵を強く

後押しした。おそらくこれは、素堂自身の望みでもあった。その秀逸さゆえ、若くして医界の要務を担わざるを得ない素堂に、長崎遊学の機会は遂に訪れることがなかった。

米沢市の上杉博物館が所蔵する父昇廼や、素堂の書簡をみると、貪欲に新奇の療法を獲得し、既存の学問に風穴を空けようとする意欲にあふれている。帰国のさい、救庵はシーボルトより直々に眼科手術器具一式を贈与される栄誉を得た。

一方、素堂は洋学の技量を極め、わが国初の西洋小児科翻訳書『幼幼精義』（天保十四年）を刊行する。ともに藩の医療環境充実を期し、本懐を遂げるため切磋琢磨して、成業に努めたのである。米沢の蘭学は以降、ふたりを軸として一層の隆盛を迎える。

それにしても当時の遊学は、藩主の好学とか家族・知友の理解、時宜と良き師に巡り会える機会は、あるいは、教育制度の充実とか経済・社会の成熟とはまた、別の次元に潜んでいたのかもしれない。

（うみはら・りょう 住友史料館研究員）

知られざるライバル②

堀内素堂 と 伊東救庵

海原 亮

●各社の特色

原（思文閣出版）…本日は、京都の専門書出版社にお集まりいただいて、専門書出版の現状・これからの姿についてお話しいただきます。はじめに各社の簡単な紹介をお願いします。

思文閣出版は、もともと古書店で昭和一二（一九三七）創業です。古典籍・古書籍を扱う中で、まずは復刻出版から始め、研究者とのつきあいが増えてくるにもなつて、学術書の出版にのりだし、現在は年間五〇点ぐらいを刊行しています。

神谷（人文書院）…人文書院は、大正一一年（一九二二）の創業です。戦前のことは詳しくわかりませんが、戦後、サルトルの著作を刊行し始め、その後しばらくはヘッセやスタンダール、ゲーテといったいわゆる文学全集が中心でした。現在、刊行ジャンルは人文書全般にわたっています。

内容的には、学術専門書よりは教養書と呼べるものが多く、書店さんの店頭に置いていただく商品が中心です。年間の刊行点数は、近年三〇点前後で推移しています。

鈴木（京都大学学術出版会）…大学出版部は、

ていーたいむ

座談会

京都専門書出版社の現在と未来

かみ や まさ ふみ

神谷理史

（人文書院
営業部部長）

すず き てつ や

鈴木哲也

（京都大学学術出版会
専務理事）

にし むら ひろ たか

西村明高

（法藏館
代表取締役）

聞き手
はら こう いち

原宏一

（思文閣出版
新刊事業部部長）

宿命的に大学、あるいは研究・教育状況に正面から向き合わざるを得ない性格を帯びています。このほかにもう一点、私どもの性格を規定しているのは、比較的新しいということです。

日本でもっとも古い大学出版部は早稲田大学出版部で明治時代に誕生しています。東京大学出版部が設立されたのは一九五一年です。それに対し私どもは一九八九年の設立です。しかもはじめの七、八年は明確な方向性を打ち出せずに低迷し、一九九六年の事実上の再建を経て、ようやく活動の幅を広げていきました。九六年というのはご承知のように出版不況が始まる年です。つまり市場が縮小していく中で立ち上げて拡大してきたという点が、われわれ独自の性格を作ったのだと思います。

西村（法藏館）…法藏館は仏教書の専門です。慶長年間（一五九六―一六一五）に創業し、一般書から専門書まで、宗派にもこだわっていません。ただ、東本願寺の門前にありますので浄土真宗ものが半分以上を占めています。ほかの出版社と比べた場合の特徴は、書店も併設している点です。

●どうすれば販路は広がるか

営業の中心は直営の法藏館書店で、全国の浄土真宗系寺院二万か寺を主な顧客として小社の書籍を販売するというのが基本的なスタイルです。長年このスタイルを続けてきたのですが、大学で本を買う学生が減っているように、お寺では門徒さんが減っています。ではそれによる売り上げの減少をどう解消するかというと、これは通販の考え方ですが、客単価を上げることがまず考えられます。もう一つ、これは書店があるからできることで、他社の本を仕入れて売る。また、ごく最近の新しい取り組みは、お寺の管理ソフトの販売です。しかも、ただソフトを売るだけではなく、ソフト会社に協力してもらい、管理ソフトを立ち上げると小社の新刊情報が出てくるようにしました。とにかく売るときかけを増やして、間口を広げていこうと模索しています。法藏館の強みは、今述べたように販路が通常の取次（書籍の間屋）ルートだけではない点なので、それを活かしていきたいと思っています。

原…なるほど。販売に関しては皆さん独自の努力をされていると思います。思文閣出版の場合は、学会や研究者・大学研究室へのダイレクトメールを中心に情宣活動を組み立てています。書籍ごとに適した学会・研究者の層を検討し、その層に直接情報を届けることを心がけています。

鈴木…われわれの書籍は対象がはっきりしているだけに戦略は立てやすいのですが、販路は広げにくいですね。

神谷…私が入社した一九九〇年ごろは、まだ人文書の専門取次と

いうのがありました。関西でいえば柳原、東京でいったら鈴木書店があり、そこが自分たちの目が届かない書店にまで、目配り、気配りをして本を届けてくれた。その当時は、人文書も書店でそれなりに売れていて、常備寄託というかたちで、新刊だけでなく既刊書も書店に長期間預かってもらい、それを回転させるというのが基本スタイルでした。今は書店にただ置いても本が売れませんし、専門取次も倒産してしまいました。でもそれに変わるものは見いだせていないのが現状で、京都・大阪、そして東京の書店への営業にひき続き力を入れています。

原…常備委託をお願いしている店舗数はどのくらいですか。

神谷…だんだん減ってきていますが、今は三〇〇店前後です。サルトル全集全盛の六〇〜七〇年代は今よりずっと多かったはずですよ。

鈴木…うちは常備店舗ゼロですから、あるだけでうらやましいです。書店流通は基本的には、新刊刊行時に書店から事前注文を取り、取次の配本パターンとすりあわせて配本するという方式です。とにかくわれわれは創設したときすでに市場が閉塞状態で、既存の市場に依存した販売スタイルはとりにくかったのです。

一方で、先ほど原さんが言われたように、著者と同分野の限られた研究者たちに情報を流すだけでいいのか、とも思います。それではほかの領域の読者に本を届けることができないからです。現在の専門書出版のあり方は、われわれ大学出版部も含めて、研究者のニーズから離れているのではないかと強く感じます。私

どもの書籍は専門書としては低価格だと言われている。頁あたり一〇円（四〇〇頁の場合四〇〇〇円）程度が多いです。するとほかの大学出版部の方からは、安すぎると思われる。また、部数も一〇〇〇部刷っているという話をする、「うちならその半分以上の部数で倍の定価をつける」と言う。わたしはそこにこの業界の病理があると思っています。すなわち、せいぜい三〇〇〇〜四〇〇〇部しか世に出ず、ごく狭い同業研究者にしか消費されないものは学術雑誌というかたちで普及させればよい。そうではなくて、人類学であれば、その周辺の社会学・地理学など、領域をこえて近接する分野の研究者にもその方法や視点が評価され、興味を持っていただけの研究であれば、五〇〇部ではとても足りないわけです。しかし現状を見ても、研究者もわれわれも、今申し上げたような発想に必ずしもなっていない。そこで、定価や部数の問題にはつねづね頭を悩ませています。

原…たいへん興味深いお話ですね。もちろん小社でも、限られた同業の研究者だけに情報を届けようとしているわけではなく、周辺領域にどのようにして販売するかを、個々の書籍ごとに考えているのですが、それにしても、どちらかといえば部数を減らして定価を上げるという設定になりがちです。

西村…現在、一般書店に頼った営業は難しいですし、高額商品は



神谷氏

売れない、大学の研究費などは年々減ってきている。だからといって割引販売ばかりしていたら値崩れしてしまう。すると部数を減らすしかない。そして部数が減れば定価が上がる。定価が上がれば売れない……、という悪循環に陥っています。編集部は値段を下けたがり、営業部は売れないから定価を上げたがる。その調整が難しい。マーケティングがうまくできればよいのですが。

鈴木…負のスパイラルですね。国からの国立大学への運営費交付金が毎年削減され、来年度は4・8%カットされようとしているとか、そういう時代になっています。悲惨な大学では、日常的な個人の研究費が一人当たり年間一五万円しかないというんですね。電話代で終わります。図書館の書籍購入費も圧倒的に減っています。このような中では、部数を絞り定価を高くして、とりあえず図書館は買ってくれるだろうという発想で市場を縮小させていくと、すぐに行き詰まると思います。

●読まれる本をつくるために

原…その一方、研究成果をとにかく公開しなければ評価されないというところで、「出版」が非常に求められている。鈴木さんは大学出版部協会の広報誌『大学出版』（No.七四、二〇〇八・三）に寄

せた論文で、「この国は「學術書」という名の紙ゴミの山になるだろう」とお書きになっていますね。同じ号ではジュンク堂書店の福嶋聡さんが「いつ消え失せても困らないような書物の粗製乱造は、出版業界にとって、自らの存在理由の否定に他ならない」ともおっしゃっています。

鈴木…アメリカでも九〇年代に同じことが起こっていたんです。

つまり、研究が盛んになるなかで、研究者が増えていく。しかもポストの終身雇用がなくなります。今の日本もそうですけれども、そうしたなかでポストを得るためには、業績が必要だということ、論文が量産される。それをそのまま大学出版部が引き受けて出版してしまっただけですね。当時アメリカには大学出版協会に加盟している大学が一二〇ほどあったのですけども、九〇年代が終わってみたら、そのうち黒字経営は一〇ぐらいになってしまった。

あとは完全に赤字転落で、大学丸抱えか、大学からも売り飛ばされたのです。それまでは、だいたい二〇〇部ぐらいは売れていたと言います。アメリカの人口は日本のほぼ倍なので、日本で言えば一〇〇〇部と考えればよいでしょう。ところが九〇年代が終わってみたら、一アイテムあたりの売上が二〇〇〜三〇〇部に減ったと言います。つまりポストのためだけの論文なんて誰も買わないわけです。学位論文を右から左に印刷したものが量産さ



鈴木氏

れるなかで、結局みんなバタバタと倒れる。日本もアメリカと同じことになりつつあるのを感じています。その隘路に陥らないことが、今すごく大事だと思います。

原…出版社の目利きや編集力というものが問われますね。

鈴木…そうですね。最近の新しい方法とか、視点に関心を持っておかないとダメですね。定価の問題に少し関わりますけれども、手に読まれないとやはりダメだとわたしは思います。ここ五年くらい、領域の蛸壺化とか言われて、若手に元気がなかった時代がある。今でも大学院生が就職できないポストク問題というのは社会問題ですが、むしろ若い大学院生が増えたことによって非常に潑刺としてきた分野があるんですね。たとえばさきほどの人類学で言うと、音楽とか歌といった対象は伝統的な人類学者はあまり扱ってこなかった。でも最近では、音大を出た人が人類学者にな

って、この素材を音楽理論でやってみたら……となるわけです。そうした状況があるということはやっぱり知っておかないといけません。

そういう若手の潑刺とした状況を反映したり、あるいはそこに対してものを言う、訴えるような本を提供するために、どういう方法論で若手がやってくるのかということは見ておいたほうがいいと思います。

原…人文書院さんは近年新しい分野に取り組んでいますね。

神谷…一番の要因は編集者の世代交代が進んでいるからです。今はもう三〇代ぐらいの編集者ばかりです。だから出てくる本は当然変わってきているし、著者・書き手の方も変わってきています。ちよつと前だとフリーターものの本があったりとか。ただ、まだうちは編集者が若返っている分、どういう方向で行くかという方向づけが、社としてはでき

ていない。それぞれの編集者がそれぞれ頭のなかで考えながらやっている、という状況です。どういう方向に行くのか、というのがまだ未知なんです。

●協同が大事

原…新たな領域、あるいはひとまわり大きな読者層に販売するとなると、どこにどうやって、という問題が出てきますね。

鈴木…たとえば学会会場での販売で言えば、いつもよりもうちよつと広げて他の学会にも本を持って行くというのがありますね。いつもは目に触れない本を見てもらうということです。

西村…うちはそれをやっているんです。「法蔵館書店ニュース」といって、毎月、前月に法蔵館書店に入荷した新刊を紹介しています。



原

神谷…御社のものだけではなくですね。

西村…メルマガで流すだけでなく、小冊子にして、注文のあったところに同封したり、私が営業で回った書店さん約四〇件に定期的に送らせてもらっています。

ここ最近やっているのは、最後のページのところに「今月のおすすめ」を設けて、過去の本や売れていないけど売りたい本を入れたりしています。A5判で一二ページから多いときで一六ページになる

んですが、結構見てもらえるんです。新刊点数で言うところ、平均三〇点ぐらいでしょうか。うちで扱う仏教書だけでこれぐらいあるわけですから、ほかの書店さんが人文でくつたらすごい点数でとても面倒みきれないでしょう。

鈴木…そういう点では、私はもつと版元どうしが協同性を発揮してもいいと思いますね。一社だけでは満たせない需要というのはあるんですね。最近特徴的なものが、たとえば大学である授業をする時に、東大出版会の本を五〇ページ、うちのを三〇ページ使って、どこどこのを二〇ページ使って、あわせて一〇〇ページの冊子を作りたい、という切実なオファーです。一版元だけでは、こうしたいまの研究・教育需要を満たせない。

京都にこれだけ専門版元があつて、それぞれ特色あるなかで、この領域にはこの版元さんの存在感はあるけど、うちにはないと

いうときが当然あります。アマゾンなんかで出版社を問わず関連書を勧めるシステムがありますけれども、そういうことができるようになる、かなり違ってくると思うのです。

西村…音楽業界はやっていきますね。昔だと所属事務所が違うアーティストは一枚のCDに入りませんが、最近は所属事務所が違うのに、何人ものアーティストが一枚のCDに入っています。CDの中から一曲だけ購入することも可能です。

鈴木…音楽のダウンロード販売はバラ売りですよね。本にもそういうのがあってもいいですよ。

西村…出版業界だと、農文協さんが農業の事典を切り売り販売していますね。でも他社と協同となると、採算的になかなか難しいんじゃないでしょうか。

鈴木…そのモデルはいろいろ考えられると思います。学術出版で五年以内で実現可能なのは、iPad用にアップルのwebストアに電子版を登録するとかではなくて、さきほど西村さんがソフトウェアに新刊案内をつけたとおっしゃっていましたが、それと似たことで、京大生協で販売するパソコンに、新人生向けの電子コンテンツを入れる、ということじゃないかなと思っています。それを今進めています。書籍全部でなくても、一部だけでも読めるようにして、クリックすればそのホームページに飛



西村氏

んでいくとか。京都の版元が集まって、新人生に向ける一〇〇冊セレクトなどを企画することもできます。協同することで、いくつかの問題は解決すると思うのです。

神谷…京都の出版社の多くは専門書版元で、個性的ですから、協同によっておもしろいことができそうですね。

原…この一〇月末に「京都出版社まつり」という販売イベントを企画・実行しました。本日おみえの三社を含めた一六社の書籍を一堂に並べ、三日間でのべ約六〇〇人の方に来場していただきました。正直売上は満足できるレベルではなく、販売方法や情宣・マネジメントも含め反省点はたくさんありますが、もっと練ってこれからも同様の取り組みを続けたいと思っています。

西村…継続して続けることが大事だと思いますよ。

鈴木…昔の京都のいいところは、研究領域の違う先生方が同じ場所にいて議論しあっていたところですよ。

今西錦司の時代だとか。それを助ける役割を出版社が果たしてあげたいですね。われわれ出版社は多様な研究領域をつなぐ存在です。

原…これからも力をあわせられるところはあわせていきたいと思っています。本日はありがとうございました。

(二〇一〇年二月八日 於…思文閣出版)

五代史とわたし

庶民の歴史を研究したい。大学三年生ぐらいのころ、当時の指導教員であった渡辺信一郎先生に訴えたことを覚えている。もちろん中国唐代史の場合、官製の歴史書をつうじてしか歴史を見ることはできないので、それが難しいことはじゅうじゅう知っていた。それでも先生に唐末に勃興してくる諸勢力がそれに近いからと、揚州でおこった道教系の妖しい反乱を紹介していただき、卒業論文のテーマとした。

その後、同じ大学の修士課程に入り、やはり庶民の歴史を押すわたしに、渡辺先生は五代十国時代の呉越国が面白いよ、と教えてくださった。確かに呉越国は、漁夫を父に持ち、塩の闇商人をしていた錢鏐せんりゅうという男が建設した地方国家だったので、すぐに飛びついた。そこから、わたしの五代史研究ははじまった。

ところが呉越国を調べていくと、分らないことばかりだった。呉越国王は、当時の正統王朝でもある五代から冊封を受けることで即位するが、実際には海外国とも接触をもち、しかも海外国に対して冊封をおこなっている。中国大陸に向かっては天子の家臣を演じながら、海外に向かってはまるで天子であるかのように振

山崎 覚士やまざき さくし

る舞う。この呉越国の権力構造を理解するのは大変だと思った。しかも出身は、確かに庶民である。そんな男が激動の時代に直面し、どのように身を処して国家建設にまでこぎつけたのか、不思議でたまらなかった。

そこで、呉越国王の大陸に対する権力のかたちと、また海外における立ち位置、そしてそんな国家を生んだ錢鏐の初期勢力を取り上げて、修士論文をまとめあげた。

その後、別の大学院の博士課程にすすみ、呉越国をより理解するためには、五代十国という時代そのものを理解しなければだめだと思ふにいたった。五代王朝はどのような位置づけで呉越国王を置いていたのか、また他の国に対してはどうだろうか、さらにはそうした五代王朝と十国との関係を成り立たせている国際秩序とは何なのだろうか、つぎつぎと難題が降り注いできた。それだけではない。呉越国が海外に勢力を伸ばしたきっかけは何だろうか、呉越国が興った両浙地域（現在の浙江省）とは、唐末からどのような場所だったのだろうか、と考えるようになっていった。

それらに関する幾編かの論文をまとめて博士論文「中国五代国家論」を提出した。五代という時代をたんなる分裂時代であると無条件に前提とするのではなく、五代という時代に、各国を結び付ける国際秩序を見出そうとした。それにはまず、「中国」と呼ばれる正統王朝はどの範囲をいい、その内部ではどのような地域支配体制が取られていたのかを明らかにする必要を感じた。そして、その「中国」と十国と呼ばれた諸国との国際関係はどうであったのか、またその国際関係の中で呉越国はどのような位置づけであったのかを論じた。

博士論文の後半では、相反するかのような呉越国の立国の要因をさぐり、そして呉越国がどのような海外政策をおこない、そして呉越国の興った両浙地域をいかに変えていったのかを論じた。

このたび刊行された同題の拙著も、博士論文提出後に書いた論文をいくつか足したものだ、論旨は変わっていない。五代という中国史でも特異な時代を語るにはまだまだ検討が不十分で、とくに呉越国以外の諸国についてはほとんど触れていない。それで五代十国時代を語るのかという批判は目に見えているのだが、それでも呉越国を見ればだいたい（単なる逃げだが）五代という時代像がわかるのでは、という筆者なりの答えは出したつもりである。

研究の出発点が呉越国だったので、現在では時代を宋代にのばし、呉越国がその後の歴史に何を残したのか、という視点を保ちながら研究を進めている。とくに両浙地域は、宋代に入ると、海

外貿易を所管する市舶司が設置され、また日宋貿易の中国側の玄関となる場所であった。唐末から呉越国時代にかけて、両浙地域は海上貿易の重要な拠点となったのだが、分らないことが多い。筆者から見て宋代の両浙地域はまだまだ研究の余地を残している。

同様に、呉越国以前の両浙地域も課題だ。なぜ唐末に錢鏐のような男が出てくるのか。錢鏐だけではない。十国を興した英雄たちも草賊あがりが多く、また国家を建設できなかった諸勢力も、やはりけっして身分の高い者たちではない。先に書いた卒業論文のテーマであった揚州の道教集団も、茶の仲介業者や乞食までくわわって、権力を手中におさめようと暴れ回っている。どろくさい庶民たちがいきいきと活躍できるのはなぜか。唐末の社会とはどんな風であったのか。今後も考えてゆきたい問題である。

自分が貧しい庶民の出なので、庶民のことが気にかかる。かれらは時代の激流の中でどのように生き抜いたのか。それはそのまま自分の人生への内省と野心に直結していると感じている。

（佛教大学准教授）

薔薇と桜

芥川龍之介の「神神の微笑」は、芥川とキリスト教の関係を考える上で重要な作品の一つであり、また、最後にそれまで語られてきた話が、実は南蛮屏風を見ている語り手の想像であったという種明かしがされて、いかにも芥川らしい小説である。

この小説の主題は、外国の文物を受容して日本化する、日本文化の「造り変える力」ということだが、冒頭の場面で、キリスト教に代表される西洋の文化と、日本の文化を、それぞれ象徴する花が描かれているのが印象深い。

時は春。主人公のオルガンティノ神父は夕明かりの中、南蛮寺の庭を歩いているが、庭には西洋の植物が植えられていて、「殊に咲き始めた薔薇の花」が「薄甘い匂を漂わせ」、「この庭の静寂に、何か日本とは思われない、不可思議な魅力を添えるようだった。」

彼は憂鬱の念にとらわれていて、「この国の風景は美しい」と自らに言い聞かせながらも、日本から一日でも早く逃れたいという心情を吐露する。その彼の眼に映ったのが「点々と木かげの苔に落ちた、灰白い桜の花」である。夕闇の木立の間に一本の枝垂

増田 裕美子

桜が「夢のように花を煙らせて」立っていて、彼はとっさに「降魔の十字を切るうと」する。「それほど無気味に見えた」桜は、無気味というよりむしろ「何故か彼を不安にする、日本そのもののように見えたのだった。」

花は洋の東西を問わず、とくにその美しさと、実りをもたらす生命力によって、すぐれて女性的な表象であるが、薔薇と桜はそれぞれの文化の中に深く根を下ろしていて、文化の相違をも如実に示すことは、芥川の文章からも感じ取れる。

薔薇は周知のごとく、そもそもはヴィーナスの花として愛欲を表すものであったが、マリア信仰の高まりとともに聖母マリアの花となった。こうして薔薇は天上的な愛を表すものとなり、たとえばダンテは『神曲』天国篇において、天国の永遠の薔薇——その花芯に天の女王である聖母マリアが座している——を描いた。

薔薇は円形をなす花の形状が完全な自足性を示しており、天国に咲く至高の花にふさわしいが、一方の日本の桜はどうであろうか。

日本神話の天孫降臨説話には天孫のニニギノミコトと山の神の

娘コノハナノサクヤビメの聖婚が語られている。コノハナ（木花）とは桜の花のことで、稲穂の神格化であるニギノミコトとの聖婚は、稲の豊穰を桜の花の咲き具合で占ったことと関連している。

コノハナノサクヤビメには別名としてコノハナチルヒメの名が『古事記』に見える。また、ニギノミコトはもう一人の山の神の娘であるイワナガヒメがあまりに醜いために、美しいコノハナノサクヤビメとだけ婚姻をした。その結果、人間の命はイワ（磐）のように永久不変ではなく、桜の花のようにはかなく散る、有限の寿命になった、と語られている。

このように桜は花そのものよりも、花が散ることが重要であり、美しさも生命も永続するものではないと教えてくれている。そして日本人は、西洋の薔薇のように永遠に咲く花を希求するのではなく、桜のはかなさをよしとした。

『古今和歌集』の春歌の部には、桜の歌、ことに花がうつろい散っていく「落花」を詠った歌が数多く収められているが、ここでは紀貫之の次の歌を紹介したい。

桜花散りぬる風のなごりには水なき空に波ぞ立ちける

桜の花を風が散らしてしまったあとの名残として、はらはら舞い落ちる花びらが水もない空に波を立てるかのようだ。この桜のイメージは貫之の脳裏にまさに名残となって焼きついた残像であり、「水なき空」という表現とあいまって、この歌を忘れ難いものになっている。

『古今和歌集』にはまた、恋歌の部に小野小町の次のような歌がある。

色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける

色には現れずに移り変わるものは世の中の人の心という花であることだ。恋する人の心は変わりやすいものであることを、花が「うつろふ」（衰え散る）ことになぞらえているのだが、このように見てくると、この世に永久不変のものは何もないことが思い知らされる。

むろん人々は花の美しさを愛でるためにこぞって花見に出かける。私の勤務している大学のそばには千鳥ヶ淵という桜の名所があつて、桜の季節になると、駅から大学への道は雑踏で歩くのも容易ではない。また二、三年前、私は花の季節に京都を訪れ、平安神宮の神苑の枝垂桜があまりに見事で何枚も写真を撮ったことを思い出す。

この神苑の桜を谷崎潤一郎が『細雪』で、蒔岡家の姉妹たちが毎年楽しみにしている花見の舞台として描いているが、その場面で姉の幸子は未婚の妹たちの娘盛りが過ぎ去ることを惜しむ気持ちを披瀝している。

やはり桜は時の移ろいを感じさせずにはおかぬものなのだ。オルガンティノ神父が桜におののいたのも、すべてが移ろいゆく時の中にあることを桜が知らしめたからにはかならない。

（二松学舎大学教授）

海外からみた日本の中世村落

原田信男 はらのぶを

私の恩師・木村礎先生は、一九七〇年の夏に西ドイツを回られて帰国した後、“日本と西洋で、あれほど村落景観が異なるのに、同じ封建制概念で理解しようとしたことはおかしい”という発言をしきりにされていた。そして不肖の弟子である私は、一九八五年の春に、初めての海外である韓国の村々を見て回って、“こんなに村落景観が似ているのだから、朝鮮と比較・検討しつつ、村落史を研究すべきだ”という感想をお話したところ、先生は先の発言内容を繰り返された。

この時の会話は、外国といってもヨーロッパとアジアでは違う、というレベルで終わったが、その意味の重さを、今、私は強く実感している。四〇代はヨーロッパを歩き回ったが、五〇代前後からの十数年は、西アジア・中央アジア・東南アジアに向くようになって、とくに東南アジアにおける日本との共通性が気になっていた。この地域には、私たちが違和感なく溶け込める風景や感覚というものが確かにある。

ようやく最近になって、その正体が稲作農業という生産基盤と、それを可能にする気候にあるという単純な事実に気が付いた。コ

ロンブスの卵のような発見でしかないが、これはきわめて重要な問題である。私たちの生活は、米と魚を主体とするもので、それが村落や意識・信仰の在り方に、大きな影響力を持っているのである。ただ日本の米文化は、あまりにも異様で、社会的価値が米に収斂しすぎたため、東南アジアに広がるブタの飼育文化を欠落させたという点に特色がある。

恥ずかしい話だが、かつて宇野円空の名著『マライシアにおける稲米儀礼の研究』を読んだとき、「米を作りに畑に行く」という記述が気になって仕方がなかった。マレーシア世界の稲作は、水田よりも焼畑が中心であることを知らずに、米といえば水田しか念頭になかった私は、愚かにも日本のことにしか想像が及ばなかったのである。二〇〇三年に初めてラオスを訪れて焼畑の稲を見たとき、宇野の文章が即座に理解できた。

その後、幸い奈良文化財研究所の松井章氏が主宰する共同研究に、二〇〇九年から参加することになり、ラオスの村へチームで三回ほど通い続けるという機会を得た。とくにコクナンという北部ラオスの村落調査では、民家に寝泊まりしていたが、朝夕に村

内を歩くと、実に興味深い光景に出会えた。焼畑を主体に水田も営む稲作農業の村であるが、昼間の農業労働をはさむ時間には、実にさまざまな作業風景が見られる。鍛冶・大鋸・船造り・漁網作り・綿打ち・糸紡ぎ・染織・機織り・竹壁作り・屋根作り・竹籠編み・葉作り・製粉・麴造り・酒造り等々が、家々の周辺で行われている。

ほとんど中世の職人絵巻さながらの風景が、朝夕の時間に展開するが、彼らは職人ではあり得ず、農業を主体とする村人たちなのである。また川沿いの村はずれの市場は、一遍上人絵巻における市の場面を彷彿とさせるもので一日に一度市が立つ。そこには衣料品店・食料品店・雑貨店・荒物店さらには食堂も並び、早朝に始まって午前中には店じまいするが、それらの商人は全てコクナンの村人である。つまり市日になると農民が商人に変身する。基本的には職人も商人も農民なのである。

こうしたラオスの村から見えてくるものは、中世史家・網野善彦氏が提起され、広く賛同を得た中世職人論の危うさである。もともと職人絵巻には「職人」とあったのではなく、「道々の者」という表記がなされていたことは、網野氏も承知していた。にもかかわらず職人論が盛んになると、近代的な職人概念と混同されて、多くの人々が中世の「職人」たちを専業と思い込むようになった。しかしコクナンに限らずラオスの村々を歩いてみると、どう考えても中世職人論は成立しようがないというのが私の実感である。ただ、あくまでも実感は実感でしかないのです、なるべく早く、

これを論文にしたいと考えているが、眼の前の仕事如山積しており、なかなか時間が取れない。北部ラオスのコクナン村における村落景観と生活のモノグラフは、いちおうまとめてはあるが、まだ公表の段階には至っていない。ましてや中世職人論の本格的な批判ともなれば、もつと精緻な詰めを行う必要がある。ただ現代のラオスの村々で、朝夕繰り返されている光景からは、日本中世の職人たちが、自立的な専門業者であったとすることはできない。私たちが史料を読むとき、経験的知識によって観念的に理解するしかない。しかし、ほぼ生活条件を同じくする東南アジアには、古い日本と共通する風景が残っており、意外な体験が得られる。それゆえ、そこから日本の村の歴史を見ようとする試みはきわめて有効だろう。

ただラオスも現在、急激なグローバル化の波に巻き込まれつつある。貨幣経済の進展と、国際世論を承けたラオス政府による焼畑抑制策のもとで、中国やベトナムの資本進出に後押しされた換金性の高いゴム栽培に移行する村が多い。また今日、世界的規模で進行している商品経済のために、広大な規模で商品生産を行う焼畑も見られ、自給生活に適した焼畑の再生原理が、崩壊の危機に瀕している。本来的には自然との関係では極めて豊かなはずの焼畑の村が、貨幣経済に巻き込まれたとたん、商品価値が乏しく「貧しい」村へと変貌してしまうというのが、今、世界中で進行しているグローバル化の現実なのである。

(国士館大学教授)

史料

探訪

(43)

「光明皇后発願 出曜経 卷第四」

まつ なが かず ひろ
松 永 和 浩

(大阪大学総合学術博物館 助教)

大阪大学総合学術博物館は、二〇〇二年に発足したユニバーシティ・ミュージアムである。大阪大学のモットーである「地域に生き世界に伸びる」を具体化する「交流型ミュージアム」をコンセプトに、大学の基礎研究や応用研究がどのように社会とつながっているかを発信する役割を担っている。

三年前にオープンした待兼山修学館において、館員・博物館兼任教員の研究に関わる特別展もしくは企画展を年二、三回開催し、大阪大学や豊中キャンパスが所在する待兼山に関する資料を常設展示している。常設展では、本学の源流と位置づけられる懷徳堂と適塾から系譜をひもとき、初代総長長岡半太郎や湯川秀樹など本学で活躍した研究者とその業績（湯川秀樹がノーベル賞を受賞した中間子論は本物理学部講師時代の仕事！）を紹介するとともに、古代〜現代の待兼山の変遷を発掘成果などからたどる。

なかでも目玉は、一九六四年に理学部建築現場から発見されたマチカネワニ。四〇〜五〇万年前の温帯性のワニで、全長七メートル超の骨格の大部分が残る、世界的にもきわめて貴重な標本である（詳細は小林快次・江口太郎著『大阪大学総合学術博物館叢

書五 巨大絶滅動物 マチカネワニ化石 大阪大学出版会、二〇一〇年参照）。

さて、当館の学術標本資料は約一六六万点と膨大な数に上る。その全てが当館に保管されているのではなく、多くは各部署に散在している。その他にも当館で把握できていない資料が相当数存在することは容易に想像されるが、マチカネワニが本学の有する最古級の資料であることはおそらく間違いないだろう。そこに最近、紙の資料としては古い部類に属する、正倉院宝物級の文化財が加わった。それについては二〇一〇年一月二七日付けの新聞各紙で取り上げていたが、改めて紹介することにした。

二〇一〇年九月、本学名誉教授・井上薫氏のご遺族より「光明皇后発願 出曜経 卷第四」の断簡が当館へ寄贈された。受贈に先立ち、同年六月に村田路人教授ら本学文学研究科日本史研究室の教員四名および元正倉院事務所長・米田雄介氏によって調査が行われた。これから紹介する内容は、米田氏がまとめた調査所見に基づくものである。

本資料は縦二六・六センチ×横四三・七センチの黄麻紙二張を

色時多聞正政往僭未得正意諸福也
盡得阿羅漢果六通清徹在正自由所願成
就

出曜經卷第四

皇后藤原氏光明子奉為
尊孝贈正一位太政大臣府君尊
妣贈從一位橘氏太夫人敬寫一
切經論及律莊嚴既了伏願導斯
勝日奉資冥助永庇菩提之樹長
遊般若之津又願上奉 聖朝恒
返福壽下及寮采共盡忠節又光
明子自茲誓言和濟沈淪勤除煩障
妙窮諸法早報菩提乃至傳燈無
窮流布天下聞名持卷獲福消
灾一切迷方會歸覺路

天平十二年五月日記

〔光明皇后發願 出曜經 卷第四〕
(奥書部分／大阪大学総合学術博物館蔵)

白銀の光沢紙で裏打ちし、軸装したもので、桐箱に収められている。外題・内題はないが、本文と同筆で尾題に「出曜經卷第四」とある。『大正新修大藏經』『出曜經卷四』の末尾の經文と一致することから、本經断簡は「出曜經 卷第四」の断簡であることに間違いない。注目されるのは奥書で、天平十二年（七四〇）五月一日付けの光明皇后願文が付されている。願文には父・藤原不比等と母・県犬養三千代の菩提のために一切經を書写した旨が記されている。内容は次の通り（／は改行）。

皇后藤原氏光明子、奉為／尊孝贈正一位太政大臣府君、尊／妣贈從一位橘氏太夫人、敬寫一／切經論及律、莊嚴既了、伏願憑斯／勝因、奉資冥助、永庇菩提之樹、長／遊般若之津、又願上奉 聖朝、恒／延福壽、下及寮采、共盡忠節、又光／明子自發誓言、弘濟沈淪、勤除煩障／妙窮諸法、早契菩提、乃至傳燈無／窮、流布天下、聞名持卷、獲福消／灾、一切迷方、會歸覺路、

天平十二年五月一日記

周知のように光明皇后は仏教興隆に深く関わっており、なかでもこの願文が付された一切經写経事業は量・質ともに奈良朝を代表するものである。この光明皇后發願一切經、いわゆる五月一日經は、天平八年（七三六）、入唐僧玄昉（？～七四六）が將來した当時最新の一切經目錄『開元釈經錄』（『出曜經』も記載）を基準に書写が開始され、天平勝宝五年（七五三）に東大寺へ奉納された。本經断簡はその原本の一部である。

五月一日経は合計七〇〇巻近くに上り、約一〇〇〇巻が現存するとされている。そのうち七五〇巻は正倉院聖語蔵に伝えられ、他は巷間に散在している。正倉院聖語蔵に伝来する「出曜経 卷第六」と比較すると、料紙とその寸法、光明皇后願文の文言・日付、经文・願文の筆跡、紫檀素木撥型軸が一致していることが、右の結論の有力な根拠となる。

本経断簡の伝来の経緯が問題となるが、井上薫氏が親交のあった出版社会長より一九九八年七月に贈呈されたものであることが同氏のメモから判明する。一九六二年時点で同会長が所蔵していたことまでは確認できるが（皆川完一「光明皇后願経五月一日経の書写について」、それ以前についての詳細は分からない。井上薫氏は日本古代史、特に仏教史が専門で、『奈良朝仏教史の研究』（吉川弘文館、一九六六年）において光明皇后の写経所や五月一日経について詳細な研究を行っている。まさに本経断簡のことを最もよく知る人物であったが、二〇〇九年六月九日に九二歳で永眠された。その後、ご子息の文顕氏が遺品整理を行った際に本経断簡を発見し、貴重な文化遺産の保存と活用を願って当館へ寄贈されることとなった。

当館では二〇一一年春季に、大阪大学会館において本経断簡を展示する予定である（期間未定）。大阪大学会館は本学創立八〇周年記念事業として、旧浪速高校の校舎であるイ号館をリニューアルするものである。本学の創立記念日は奇しくも五月一日。不思議な因縁を感じる。

— MEMO —

大阪大学総合学術博物館 待兼山修学館

大阪府豊中市待兼山町1-20

Tel. 06-6850-6284

ホームページ <http://www.museum.osaka-u.ac.jp/>

・ 阪急宝塚線「石橋駅」より徒歩10分

・ 入館無料

・ 日・祝・年末年始休館

・ 開館時間 10:30～17:00

【開催中】

2011年1月8日（土）

〈第12回企画展〉

「線の表現力——アートの諸形態、須田国太郎《能・狂言デッサン》から広がって——」

※須田国太郎、藤田嗣治、村上華岳など、日本近現代美術の「線」の表現の多様性を堪能できます

【予告】

2011年5月

「光明皇后発願 出曜経 卷第四」公開

大阪大学会館（現・イ号館）3階 歴史展示室にて
阪急宝塚線「石橋駅」より徒歩15分

※詳細が決まり次第、当館ホームページにてお知らせします

書評・紹介一覧 9～11月掲載分		※(評)…書評 (紹)…紹介 (記)…記事〔敬称略〕
昭和民芸紙譜		一休派の結末と史的展開の研究
(記)朝日新聞 11/7(一青窈)		(記)京都新聞 11/5
増補版 京の医史跡探訪		(記)大分合同新聞 11/15
(紹)京都新聞 11/24(松岡正剛)		(記)神戸新聞 11/18
森有礼における国民的主体の創出		(記)高知新聞 11/29
(評)日本教育史研究 第29号(森川輝紀)		追憶の記
京都 芸能と民俗の文化史		(紹)新美術新聞 10/11
(評)日本歴史 第748号(河内将芳)		(紹)京都新聞 10/19
中世前期女性院宮の研究		(評)月刊美術 10月号
(紹)日本史研究 第577号(曾我部愛)		(紹)美術の窓 11月号
平安京とその時代		小児科学の史的変遷
(紹)史学雑誌 第119編第9号(磐下徹)		(評)日医ニュース No.1179
明治期における不敬事件の研究		入門 奈良絵本・絵巻
(紹)歴史評論 第725号(廣木尚)		(評)月刊美術 11月号
西村茂樹研究		(紹)目の眼 11月号
(評)日本思想史学 第42号(河野有理)		西山浄土教の基盤と展開
北垣国道日記「塵海」		(紹)中外日報 9/23
(紹)京都新聞 10/15(松岡正剛)		(紹)教界通信 第221号
中国語圏における厨川白村現象		後鳥羽院政の展開と儀礼
(評)現代中国研究 第27号(大野太幹)		(記)京都新聞 11/12(江藤均)
(評)中国文芸研究会会報 第348号(鈴木将久)		歴史のなかの天皇陵
御堂関白記全註釈		(紹)中外日報 10/23
(記)古代文化 第62巻2号(古藤真平)		(紹)朝日新聞(夕刊) 11/17
武士と騎士		(紹)読売新聞(奈良版) 11/25
(紹)史学雑誌 第119編第10号(佐藤雄基)		(紹)読売新聞(京都版) 11/30
漱石文学の水脈		奈良 千三百年ものがたり
(記)熊本日日新聞 9/5(清水孝純)		(記)読売新聞(夕刊) 11/2
一休派の結末と史的展開の研究		天翔ける白鷗
(記)山陰中央新報 10/28		(紹)中外日報 11/6
(記)北日本新聞 10/31		

9月から11月にかけて刊行した図書

図 書 名	著 者 名	ISBN978-4-7842	定価	発行月
伝統産業の成立と発展	桑田優著	1523-2 C3033	6,825	9
西山浄土教の基盤と展開	五十嵐隆幸著	1529-4 C3015	4,200	9
後鳥羽院政の展開と儀礼	谷昇著	1536-2 C3021	6,300	9
歴史のなかの天皇陵	高木博志・山田邦和編	1514-0 C1021	2,625	10
奈良 千三百年ものがたり	すずきたみこ著	1540-9 C1021	1,680	10
天翔ける白鷗	兄玉修著	1541-6 C0093	1,680	10
近世東アジア海域の文化交渉	松浦章著	1538-6 C3022	9,450	11
アメリカン・ボード200年	本井康博著	1543-0 C3016	5,250	11

9月から11月にかけて刊行した継続図書

シ リーズ 名	配本回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	定価	発行月
茶湯古典叢書	5	5	茶譜	1528-7 C3076	21,000	9
東寺百合文書	8	8	二函三、ホ函、へ函、ト函一	1532-4 C3321	9,975	9
平成新修古筆資料集	5	5		1537-9 C1392	2,625	10
増補改訂 西村茂樹全集	9	9	訳述書 5・日記	1533-1 C3321	18,900	10
龍谷大学善本叢書	29	29	禿氏文庫本	1539-3 C3015	14,700	10
広瀬旭莊全集	11	10	詩文篇	1490-7 C3321	31,500	11

(表示価格は税5%込)

▼恥ずかしながら中学校の社会科で触れて以来このかた、遣隋使・元寇、日明貿易、種子島、シーボルト、日清・日露戦争といった類でしか海の向こうの歴史に触れたことがありません。比較文化についてはイメーজできたものの、この度『中国五代国家論』という書籍を刊行いたしました。出店した学会大会プログラムをみてもチンブンカンブン、すみやかにネットで検索といった有り様。山川出版社さんの『もういちど読む山川世界史』を手にした一年でございました。(江)

☆フェア情報

ジュンク堂書店新宿店(東京都新宿区)

歴史書懇話会フェア

「文化文政の町人文化」

「幕府諸藩の財政窮乏」

1月末まで

東京大学生協本郷外販店(東京都文京区)

・駒場外販店(東京都目黒区)

「歴史書懇話会フェア(外販のみ)」

2月27日まで

京都大学生協ルネ(京都市左京区)

「歴史書懇話会フェア」2月7～3月末まで

▼今回の座談会の内容は、本当は鴨東通信全ページを使ってお届けしたいところです。泣く泣く切り捨てたところもたくさんあります。専門書出版社の役割は、学術文化を盛り上げることだと、改めて得心しました。やることはまだまだあります。(h)

▼住友史料叢書は昔ながらの活版組み。活字というモノの集合体なので、パソコン上でも処理できるDTPと違いごまかしがききません。そのため制約も多いですが、独特の美しさは必見。まさに職人技の結晶です(M)

▼遅ればせながら『1Q84』に挑戦中。一気読みする体力はもはやなく、一章ごとに撃沈する毎日です。書き手のようにジョギングでもして、スタミナをつけるのが先かもしれません。読了はいつになることやら。(須)

▼ていーたいむ収録に参加。東京の出版社が圧倒的に多い中、その地域性を活かし、独自の発展をとげてきた京都の版元のオリジナリティを、大事にしたいと感じました。(大)

▼気がつけば師走です。炬燵の季節となり、うとうと。一度入ったらなかなか出ることがかなわず、そのまま眠りに入ります。(I)

▼表紙図版：高句麗古墳(岡子一号墓)の壁画(考古)一九六四—一〇／「高句麗壁画古墳と東アジア」より

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年4回(3・6・9・12月)刊行しております。
代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

おうとうふうしん

鴨東通信 四季報 No.80

2011(平成23)年1月10日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒606-8203

京都市左京区田中関田町2-7

tel 075-751-1781

fax 075-752-0723

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン 鷺草デザイン事務所

歴史のなかの天皇陵

高木博志・山田邦和編

二、六二五円

房総風雅史 古代・中世編

小倉光夫著

五、九八五円

安祥寺資財帳 京都大学史料叢書17

京都大学文学部日本史研究室編

五、七七五円

奈良朝人物列伝 「続日本紀」 嵯卒伝の検討

林陸朗著

七、三五〇円

御堂関白記全註釈 御堂御記抄／長徳四〜長保一年

山中裕編

五、二五〇円

平安京とその時代

隴谷壽・山中章編

九、四五〇円

後鳥羽院政の展開と儀礼

谷昇著

六、三〇〇円

花園院宸記 第19回配本 第27巻

宮内庁書陵部編

三七八、〇〇〇円

中世京都の空間構造と礼節体系

桃崎有一郎著

七、五六〇円

一休派の結衆と史的展開の研究

矢内一磨著

八、一九〇円

京都の都市共同体と権力 思文閣史学叢書

仁木宏著

六、六一五円

東寺百合文書 第8巻 二函3・木函・八函・卜函1

京都府立総合資料館編

九、九七五円

武士と騎士 日欧比較中近世史の研究

小島道裕編

九、四五〇円

近世長崎司法制度の研究

安高啓明著

五、九八五円

近世の環境と開発

根岸茂夫・大友一雄・佐藤孝之・末岡照啓編

七、八七五円

金鯢叢書 第36輯 史学美術史論文集

徳川黎明会編

九、四五〇円

増補改訂西村茂樹全集 第9巻 訳述書5・日記

日本弘道会編

一八、九〇〇円

増補改訂西村茂樹全集 第10巻 論説1

日本弘道会編

一七、三二五円

西村茂樹研究 明治啓蒙思想と国民道徳論

真辺将之著

八、一九〇円

ハンサムに生きる 新島襄を語る7

本井康博著

一、九九五円

アメリカン・ボード200年

本井康博著 同志社と越後における伝道と教育活動

五、二五〇円

北垣国道日記「塵海」

塵海研究会編

一〇、二九〇円

明治期における不敬事件の研究

小股憲明著

一三、六五〇円

知の伝達メディアの歴史研究

辻本雅史編

教育史像の再構築

五、九八五円

韓国「併合」前後の教育政策と日本

本間千景著 佛教大学研究叢書8

五、八八〇円

中国五代国家論 佛教大学研究叢書12

山崎覚士著

六、八二五円

近世東アジア海域の文化交渉

松浦章著

九、四五〇円

大阪経済大学日本経済史研究所研究叢書17

東アジア経済史研究 第1集 中国・韓国・日本・琉球の交流

大阪経済大学日本経済史研究所編

四、二〇〇円

伝統産業の成立と発展 播州三木金物の事例

桑田優著

六、八二五円

技術と文明 31 16巻2号

日本産業技術史学会編

二、一〇〇円

住友史料叢書 25 年々諸用留十番

住友史料館編

九、九七五円

小児科学の史的変遷

深瀬泰旦著

九、四五〇円

シーボルトが蒐集したシダ標本

加藤信重著

七、三五〇円

禿氏文庫本 龍谷大学善本叢書29

大取一馬責任編集

一四、七〇〇円

西山浄土教の基盤と展開

五十嵐隆幸著

四、二〇〇円

江月宗玩 欠伸稿訳注坤

芳澤勝弘編著

九、九七五円

太子信仰と天神信仰 信仰と表現の位相

武田佐知子編

六、八二五円

天翔ける白鷗 愚中周及の生涯

児玉修著

一、六八〇円

奈良千三百年ものがたり

すずきたみこ著

一、六八〇円

平成新修古筆資料集 第5集

田中登編

二、六二五円

茶譜 茶湯古典叢書5

谷晃・矢ヶ崎善太郎校訂

二一、〇〇〇円

尾陽 第6号 徳川美術館論集

徳川美術館編

三、一五〇円

応用美術思想導入の歴史

天貝義教著 ウィーン博参同より意匠条例制定まで

七、八七五円

追憶の記 画家芝田米三と歩んだ人間賛歌の50年

芝田藤子著

二、一〇〇円

俱舍論音義の研究

西崎亨著

九、四五〇円

『狭衣物語』 享受史論究

川崎佐知子著

二、六〇〇円

入門 奈良絵本・絵巻

石川透著

二、一〇〇円

広瀬旭莊全集 詩文篇

岡村繁・井上敏幸編

三一、五〇〇円

漱石文学の水脈

坂元昌樹・田中雄次・西楨偉・福澤清編

二、九四〇円

中国語圏における厨川白村現象

工藤貴正著 隆盛・衰退・回帰と継続

六、三〇〇円

一九二〇年代東アジアの文化交流

川本皓嗣・上垣外憲一編

二、九四〇円

言語のあいだを読む 日・英・韓の比較文学

大澤吉博著

九、四五〇円

高句麗壁画古墳と東アジア

門田誠一著

二月刊行予定

高句麗の人々が営んだ古墳は独特の形状と内容を持ち、さまざまな視点からの研究が行われてきた。壁画に描かれた図像や題材のなかでもっとも重要な対象である墓主像に焦点をあて、文献や金石文と照らし合わせながら体系的に考察する。
高句麗社会と文化の一端を復元し、古代のみならず、東アジアの歴史的時空の再構築をめざす労作。

◆内容◆

- 第一章 高句麗古墳壁画の墓主像
東アジアの壁画墓に描かれた墓主像の基礎的考察／高句麗古墳壁画に描かれた塵尾を執る墓主像 ほか
- 第二章 高句麗古墳壁画に表れた文化と信仰
銘文の検討による高句麗初期仏教の実相／高句麗壁画古墳に描かれた仏教的行事 ほか
- 第三章 東アジアにおける高句麗壁画古墳の史的環境
装飾古墳における大陸系人物像の出現／高句麗古墳壁画と飛鳥時代古墳壁画の比較検討 ほか
- 付論 高句麗古墳における瓦磚使用の方法とその意味／高句麗古墳にともなう石柱についての基礎的知見
- 終章 高句麗古墳壁画と東アジア世界

◆A5判・四六〇頁／定価九、〇三〇円
もんだ・せいいち：一九五九年生。佛教大学歴史学部教授。

文学のなかの考古学

門田誠一著

佛教大学鷹陵文化叢書19

文学と考古学との接点を求めることは、方法の異質性からこれまで行われてこなかった。考古学の分野を研究する著者が、文学と考古学の間に生まれる新たな可能性を提示する。

◆A5判・三〇八頁／定価二、四一五円

漢簡の基礎的研究

大庭脩編

簡牘書翰の機能と特征 (大庭脩・李均明・劉軍)

漢代太初暦考―漢簡に見られる「節氣」を手掛かりとして― (吉村昌之)
日本における中国古印の研究〔付：日本収蔵中国古印図録〕 (陳波)

『居延漢簡補編』の出版 (大庭脩)

中国漢牘研究文献目録〔一九〇三―一九九五年〕 (門田明)

◆B5判・二二〇頁／定価一三、六五〇円

東アジアの交流と地域諸相

金沢星稜大学ORC北東アジア交流研究プロジェクト編
経済・文化・学術・観光の視点から北東アジアの「交流の多様性」を明かし、「アジア地域交流学」の構築を目指す。

◆B5判・一七〇頁／定価三、三六〇円

蓬萊山と扶桑樹 日本文化の古層の探求

岡本健一著

不老長生の仙境「蓬萊山」のイメージと、生命更新の仙木「扶桑樹」のシンボルが、日本の古代文化におよぼした影響の諸相を明らかにする。

◆A5判・四四二頁／定価五、七七五円

東アジアと『半島空間』

山東半島と遼東半島

千田稔・宇野隆夫編

文明にとって半島は、文化の拡散過程におけるゲートウェイの性格を持つと同時に、文化がそこに滞留し醸成する場でもあった。古代・中世から近代におよぶ通時的・学際的・国際的な議論を通し、東アジア文明論に新視点を与える。

◆A5判・四二〇頁／定価五、〇四〇円

佛敎大学研究叢書⑫

中国五代国家論

山崎覚士著

【最新刊】

中国史において分裂・混乱期とされてきた五代十国時代は、本当に単なる無秩序・不条理の時代であったのか。

本書では当該期に働く国際的な秩序構造を明らかにすることを目的とし、第一部では「平王」などの爵位や藩鎮制、国書の検討から「中国」諸国間の支配関係を考察し、第二部では中国の権力構造に含み込まれつつも、海上に新たな国際秩序をつくろうとした呉越国に焦点をあてて論じる。既成の史観をはなれ、「国家」の構造を明らかにする意欲作。

内容

序論 五代政治史研究の成果と課題

第一部 天下のうち篇

第一章 五代の「中国」と平王

第二章 五代「中国」の道制―後唐朝を中心に―

第三章 呉越国王と「真王」概念―五代天下の形成、其の一―

第四章 五代における「中国」と諸国の関係―五代天下の形成、其の二―

第二部 天下のそと篇

第五章 九世紀における東アジア海域と海商―徐公直と徐公祐―

第六章 唐宋杭州における都市勢力の形成と地域編成

第七章 未完の海上国家―呉越国の試み―

第八章 港湾都市、杭州―五代における都市、地域、海域―

やまざき・さとし：一九七三年大阪府生。佛敎大学歴史学部准教授。

▼A5判・三六八頁／定価六、八二五円

中国近世における国家と禪宗

西尾賢隆著

中国における仏敎の姿を正しく把握すべく、「会昌の廃仏」を円仁の「入唐求法巡礼行記」等に見るほか、異国の宗教を理解・受容するために編まれた「偽経・語録」、「僧制・清規」へと発展する戒律の受容などを検証した著者三十余年間の研究成果。

▼A5判・三八八頁／定価七、八七五円

近世東アジア海域の文化交渉

【二月刊】

松浦章著

古来、東アジア海域を舞台にした人や物の交流で活躍したのは、中国帆船であった。本書はおもに清代帆船の活動に注目して、日本・中国・朝鮮・琉球をはじめとした東アジア諸国の交流の諸相を明らかにする。

内容

第一編 日中の文化交流 清「展海令」施行と長崎唐館設置の関係／来船

清人と日中文化交流／近代日中の架橋／輪船商招局汽船の日本航行

第二編 海域を越えた文化交渉 朝鮮使節が北京で邂逅した琉球使節／清代帆船で波濤を越えた人々／海域を越えた船神たち／清代沿海帆船に搭乘した日本漂流民

第三編 言語接触に見る文化交流 袁枚「隨園詩話」と市川寛斎「隨園詩鈔」／一九世紀初期に朝鮮・中国へ漂着した難民との言語接触／清代前期の広東・澳門における買辦／清朝中国人とイギリス人との言語接触

第四編 物流による文化交渉 清代帆船が持ち帰った日本書籍／明清時代中国の海上貿易と陶磁器の流通／清国産豚の日本統治台湾への搬出について／日本植民地時代における台湾産包種茶の海外販路

▼A5判・四七二頁／定価九、四五〇円

日中親族構造の比較研究

官文娜著

思文閣史学叢書

日中親族集団の構造を手がかりに、ともに「アジア文化圏」に属する中国と日本の、近代以降における西洋異文化との衝突の原因と融合の条件を探る。

▼A5判・四三〇頁／定価七、五六〇円

王権と都市

今谷明編

日本、アジア・イスラーム、ヨーロッパの三領域から一篇の論文を収め、各時代・各地域での都市史のあり方を相互に比較検討し、「都市とは何か」という命題の解明に挑む。

▼A5判・三七二頁／定価七、一四〇円

仁明朝史の研究

仁みょうちょうし
承和転換期とその周辺

角田文衛監修／財団法人古代學協會編 二月刊行予定

仁明天皇（在位八三三〜八五八）の時代は、平安京が安定するとともに「初期摂関政治」が姿を現し、和歌、楽舞、仏教儀式などが新たな装いを見せ、「国風文化」への地均しが行われた時代であった。文献史学・考古学・美術史など各分野から気鋭の研究者を集結し、仁明朝の歴史的意義を多角的に解き明かし、日本国内のみならず東アジア世界の動向とも関連づける。

第一部

九世紀東部ユーラシア世界の変貌 山内晋次（神戸女子大学准教授）

— 日本遣唐使関係史料を中心に —

九世紀の調庸制―課丁数の変化と偏差―

「化他」の時代

— 天長・承和期の社会政策と仏教 —

平安京野寺（常住寺）の諸問題

西本昌弘（関西大学教授）

第二部

銭貨と土器からみた仁明朝

造瓦体制の変革期としての仁明朝

定額寺の修理と地域社会の変動

承和期の乾漆併用木彫像とその後の展開

平安時代前期の陵墓選地

斎宮・離宮院変遷の歴史的背景

— 離宮院遷宮にみる古代王権と伊勢神宮 —

▼A5判・三五〇頁／定価七、三五〇円

平安京とその時代

臈谷壽・山中章編

平安朝の研究を牽引してきた臈谷壽先生を中心に、京都に所縁のある研究者が、「平安京」をテーマに、歴史学・考古学・地理学それぞれの視点から意欲的なアプローチを展開した、総合論集。

▼A5判・四八八頁／定価九、四五〇円

安祥寺資財帳

京都大学史料叢書一七

京都大学文学部日本史研究室編

中町美香子・鎌田元一編集解説

巻首から巻尾まで備わった貴重な九世紀の資財帳史料の一つ、安祥寺資財帳現存の諸本の祖にあたる京都大学蔵本（旧観智院蔵本）を影印（写真版）で収録。釈文と解説を付す。

▼A5判・一七六頁／定価五、七七五円

奈良朝人物列伝 『続日本紀』 薨卒伝の検討

林陸朗著

『続日本紀』には王臣・僧侶等の死没記事のあとにその人の略伝的な記事を掲げることがある。こうした伝記的な記事を薨卒伝と言い、撰者の批評的記事を受けて極めて特色ある史料として注目される。54の全薨卒伝を、現代語訳・訓読・原文・語句解説・考察で構成。

▼A5判・四六八頁／定価七、三五〇円

撰関時代文化史研究

関口力著

思文閣史学叢書

「如帝王」と評された藤原道長の時代を中心に取り上げ、リアルタイムに日々の出来事が記される古記録・日記類をもとにして、撰関時代全盛期に生きた人物、および彼らをはぐくんできた社会について考察。

▼A5判・四八八頁／定価九、四五〇円

東京国立博物館古典籍叢刊

九条家本延喜式 (全五卷)

第二回配本 (一) 巻一・二・四・六・七甲・七乙 (3月刊行予定)

▼A5判・四六〇頁／定価一五、七五〇円

本書の特色

- ・東京国立博物館所蔵の国宝・九条家本延喜式を、紙背文書も含めて写真版で影印出版
- ・FMスクリーンによる高精細印刷。朱書きがある箇所は二色刷とした
- ・紙背文書には新撮の高精細画像を使用
- ・第五回配本に九条家本延喜式の解説と紙背文書全点の翻刻を付す
- ・写真版に延喜式の条文番号を示した
- ・紙背は横長で掲載し、できるだけ一文書を一頁でみるようにトリミングを工夫した

続刊 平均五〇〇頁・予価(各)一五、七五〇円

- | | |
|--------------------------|------------|
| (一) 巻八(十一) | 平成二三年 六月刊行 |
| (二) 巻十二・十三・十五・十六・二十(二十二) | 平成二三年 九月刊行 |
| (三) 巻二十六(三十一) | 平成二三年一二月刊行 |
| (四) 巻三十二・三十六・三十八・三十九・四十二 | 平成二四年 三月刊行 |

東京国立博物館古典籍叢刊 続刊予定

〔次回〕元暦校本万葉集 刊行時期未定

編集委員

- 島谷弘幸 (編集委員長・東京国立博物館)
 高橋裕次 (東京国立博物館)
 田良島哲 (東京国立博物館)
 富坂 賢 (東京国立博物館)
 田島 公 (東京大学史料編纂所)
 月本雅幸 (東京大学人文社会系研究科)
 吉岡眞之 (東京大学史料編纂所)

天皇陵に迫る1冊 最新研究・エピソード掲載

世界文化遺産への登録や公開論議などで注目が高まる陵墓問題。最新の研究成果をもとに、研究者18人が古代から現代の動向をまとめた、高木博志・京都大准教授、山田邦和・同志社女子大教授編「歴史のなかの天皇陵」（思文閣出版、2625円）＝写真＝が刊

行された。

陵墓問題は古代史や皇室、政治もからみわかりにくい側面もある。しかし天皇陵は、かつて花見の名所として知られていたという奈良県天理市・崇神天皇陵（行灯山古墳）、ピクニックに繰り出す行楽地でもあった堺市・仁徳天皇陵

（大山古墳）など、興味深いエピソードにも彩られている。さらに8カ所も候補地がある桓武天皇陵や、山上から遺骨を散骨させた桓武帝の皇子の淳和天皇の薄葬、埋葬地を隠すよう命じた同嵯峨天皇などの歴史も紹介している。

宮内庁による陵墓管理の根拠や戦後の発掘是非論議、天皇陵・陵墓参考地の資料や地図も載せ、案内にも手厚い。

朝日新聞 11月17日付

大阪本社版 夕刊 5面（文化）より（80%縮小）



各時代に陵墓がどうあり、社会の中でどのように変遷してきたのか、考古・古代・中世・近世・近代における陵墓の歴史をやさしく説く。京都アスニーで行われた公開講演に加え、研究者・ジャーナリストによるコラムや、執筆者による座談会を収録。

▼A5判・三四〇頁／定価二、六二五円

歴史のなかの 天皇陵

高木博志（京都大学准教授）
山田邦和（同志社女子大学教授） 編

歴史のなかで陵墓をみていくと、そこには現在では思いもよらない姿があった――

戦国大名武田氏の権力構造

丸島和洋著

戦国大名はどのような伝達ルートを紹介して家中の内外的意思の疎通を行ったのか？本書は甲斐武田氏を分析対象とし、家中を代表して他大名との外交を担当した「取次」に着目。領国支配における意思伝達経路の検討とあわせて、大名権力の中枢を構成する家臣や、大名と家臣の関係について見詰め直し、戦国大名の権力構造を明らかにする。

【二月刊行予定】

序章	戦国大名研究の現状と本書の視角
第1部	戦国大名間外交と取次
第1章	武田氏の対上杉氏外交と取次
第2章	武田氏の対佐竹氏外交と取次
第3章	武田氏的外交取次とその構成
第4章	大名間外交と「手筋」
第5章	取次の書状作成過程
第6章	取次の独断
第7章	取次給の宛行
第2部	大名家中の権力構造と領域支配
第8章	武田氏の領域支配と郡司
第9章	武田氏の領域支配と取次
第10章	武田家臣三枝氏の家意識とその変遷
第11章	武田氏の一門と領域支配
第12章	室町・戦国期の武田氏権力
終章	戦国大名武田氏権力の特質と構造

▼A5判・四三〇頁／定価八、九二五円

戦国期関東公方の研究

阿部能久著

公方発給文書の様式変化にみる権力構造の実態、鶴岡八幡宮・鐙阿寺や禅宗・一向宗などの寺社勢力との関係、関東公方家の後裔である喜連川家の幕藩体制下の位置、さらに武家故実書『鎌倉年中行事』の成立背景を探る。

思文閣史学叢書

▼A5判・三二〇頁／定価五、九八五円

東寺百合文書

京都府立総合資料館編

第8巻 二函三、ホ函、ヘ函、ト函一

東寺百合文書とは、東寺に襲蔵されてきた、奈良時代から江戸時代初期まで約九百年にわたる、総数一万八千点・二万七千通におよぶ日本最大の古文書群である（平成九年国宝に指定）。本史料集には「ひらかな之部」刊行中の『大日本古文書』未収録の「カタカナ之部」を翻刻。

▼A5判・四四二頁／定価九、九七五円

一休派の結衆と史的展開の研究

矢内一磨著

一休没後も存続した一休派の結衆とその史的展開を解明することで、中世末期の寺院研究史上の欠如を埋める。一休の印可、法嗣否定による法統断絶の危機、門派結衆の軸としての一休塔所での評議、門派での祖師忌法会を第一部でとりあげ、大徳寺復興や在俗信仰者の結衆の問題を第二部で扱う。

【内容】第一部 評議と祖師忌法会にみる一休派の結衆とその史的展開

第二部 一休派における僧俗の結衆とその史的展開

▼A5判・三七〇頁／定価八、一九〇円

京都の都市共同体と権力

仁木宏著

思文閣史学叢書

中世京都の都市構造モデルを前提に、その変容のなかから町（ちよう）の成立を読み解く。自力救済社会における武家と都市民の対峙が、やがて公儀を創出し、都市共同体を確立させることを明らかにする。

▼A5判・三三二頁／定価六、六一五円

室町期東国社会と寺社造営

小森正明著

思文閣史学叢書

鎌倉府体制下にあった室町期の東国社会に、寺社造営事業と寺社領経済が与えた影響を考察する。「香取文書」など中世東国の「売券」の長年にわたる分析に基づく成果。

▼A5判・三五六頁／定価七、三五〇円

近世の環境と開発

根岸茂夫・大友一雄・佐藤孝之・末岡照啓編

＊環境問題が議論される中でしばしば近世の環境や生活が理想的と論じられる。はたしてそれは事実なのか。江戸時代の現実に沿って、村落・河川・山野・鉱山を題材に、環境と開発の問題について改めて問い直す論文集。研究会を開催し各執筆者が研究発表と討論を重ねた成果。
＊二〇〇三年急逝された大谷貞夫先生（国學院大學文学部教授）の長年とりにくまれた江戸時代の治水と新田開発の問題を継承する。



【最新刊】

目次

- 〔序〕近世環境史研究と景観・開発（根岸茂夫）
- 〔第一編〕環境と身分・法・大地
ある開発批判言説の同時代認識と世界観（吉岡孝） 関東近世村落における雑業（キヨメ）の構造（菅根幸祐） 近世甲斐の力者と治水・開発（関口博巨） 武蔵野開発にみる近世前期の裁許（宮原一郎）
- 〔第二編〕開発と景観・生活・生業
中世・近世初期、低湿地における「村」の形成過程（長谷川伸） 新田開発後の遊水池環境変化と村落の対応（安池尋幸） 近世下総台地の造林と植生（佐々木克哉）
- 〔第三編〕治水と環境
江戸幕府の治水政策と普請組合の成立（榎本博） 享保期大井川治水と福田清助（清水正彦） 明和四年の関東筋川々普請助役をめぐる（大谷貞夫） 天保期印旛沼堀割普請の潰れ地と起返し（鍋木行廣）
- 〔第四編〕環境と山
上州山中領における山地利用とその環境（佐藤孝之） 江戸時代後期の山林資源と村社会（大友一雄） 近世、別子・立川銅山の開発と銅水問題（末岡照啓）

▼A5判・三六六頁／定価七、八七五円

近世琵琶湖水運の研究

杉江進著

二月刊行予定

本書は、古代以来、全国流通路の中でも重要な位置を占めていた琵琶湖水運の近世について、より歴史的な視点からその全体像や特徴を描き出そうとするものである。近世前期琵琶湖水運の構造と特質、廻船規定、諸浦の盛衰を取り上げて論究する。またその前提として織田信長による琵琶湖水運支配、琵琶湖を航行した船の名称をも具体的に検討し、従来の認識・評価の問題点を指摘する。
今年で琵琶湖水運研究三十年という節目を迎えた著者が、大津をはじめて近世琵琶湖水運史上重要な湊の自治体編纂さんに携わりつつ、そこで出会った史料と丹念に向き合いながら、あたたため深めてきた研究成果。

序 本書の課題と前提

- 1 琵琶湖水運研究の課題
- 2 織田信長と琵琶湖水運
- 3 忘れられた「丸船」
「丸子船」と「丸船」をめぐる
- I 近世前期琵琶湖水運の構造と特質
 - 1 近世琵琶湖水運の成立
大津百艘船と船奉行
 - 2 近世琵琶湖水運の展開
「諸浦の親郷」三カ浦の誕生
 - 3 近世琵琶湖水運の変容
「湖辺重立候」八カ浦と大津
- II 近世琵琶湖水運の廻船規定
 - 1 廻船と帳屋
 - 2 上米と乗前
 - 3 丸船・丸子船と船株
- III 諸浦の盛衰
 - 1 「諸浦の親郷」八幡若狭との窓口 今津
 - 2 東海道の渡し場 矢橋
 - 3 彦根藩と彦根三湊
 - 4 幕藩間の相克
大津百艘船と彦根三湊

すぎえ・すむ！一九五七年生。大津市教育委員会文化財保護課勤務。おもな著書に共著『栗東の歴史』第二巻（栗東町役場、一九九〇年）、『滋賀県の名所』（平凡社、一九九一年）、『園城寺文書』第五・六巻（講談社・園城寺、一九九九年）、『図説 大津の歴史』（大津市、一九九九年）など。

▼A5判・四六四頁／定価九、四五〇円

住友史料叢書

〔既刊25冊・年一回刊行中〕

小葉田淳・朝尾直弘監修／住友史料館編集

世界銅産市場においても重要な位置を占めた住友家の銅業史料は、質・量ともにわが国屈指の基本史料であり、本叢書は一万数千点にのぼる近世史料のうち、重要で継続する記録類を中心に編集。

▼A5判・平均四〇〇頁／定価各七、八七五～一一、〇二五円
《最新第25回配本 年々諸用留十番 定価九、九七五円》

伝統産業の成立と発展

桑田優著

播州三木金物の事例

兵庫県三木市の伝統産業、三木金物は近世後期に勃興し、現在にいたっている。本書は、流通機構の発達など社会的な背景にも着目し、三木金物が特産品として全国市場へ進出してゆく過程を跡付ける通史である。

〔内容〕 第一部 三木金物の成立と発展／第二部 地場産業勃興と社会文化の発達
▼A5判・三〇二頁／定価六、八二五円

近世後期瀬戸内塩業史の研究

山下恭著

塩業と醬油業における開発・経営・塩専売制・流通問題を細かく分析し、さらに塩業における燃料問題と労働条件を数量的に解明した基礎的研究の一書。
〔内容〕 第1編 近世後期の塩業と醬油業／第2編 近世後期の塩業の燃料問題と塩業労働
▼A5判・三〇〇頁／定価六、三〇〇円

近世吉野林業史

谷彌兵衛著

吉野の地に生まれ、林業とそれに携わる人々の浮沈を間近に見て育った著者が、吉野林業の光と影を、史料に基づいて実証的に明らかにした本書は、吉野林業を初めて通史的にとりあげた研究として、画期的意義を有する。幾多の困難に直面しながらも、決して屈することのなかった吉野林業のDNAを今に伝える意欲作。
▼A5判・五三八頁／定価九、七六五円

畿内の豪農経営と地域社会

渡辺尚志編

十八世紀末以降、河内国丹南郡岡村（現藤井寺市）の庄屋を世襲した豪農・地方名望家が岡田家であり、近世・近代において同家で作成・授受した「岡田家文書」は、一万数千点にもおよぶ。近年整理が進められている岡田家文書を多角的に分析し、畿内における村落と豪農の特質を経済・社会構造の観点から解明する。
▼A5判・五〇八頁／定価八、一九〇円

近世社会と百姓成立

波邊忠司著

佛教大学研究叢書 I 構造論的研究

近世社会において零細な高持百姓はいかにして自らの生活や農耕の日常を凌いでいたのか。近世社会における「百姓成立」について、領主権力による「成立」の構造を再検証し、百姓の観点から百姓自らが創出した「成立」の条件と構造を年貢負担と村内の組織編成、質入の検討により解明。
▼A5判・三一〇頁／定価六、八二五円

京・近江・丹後大工の仕事

建部恭宣著

近世から近代へ

江戸時代から明治・大正にかけての京・近江・丹後における大工の活動状況を明かした力作。寺院造営における大工の仕事、就労状況、町大工の構成と作事棟梁制度の変遷、幕末の藩士住居の図面と用材など、史料の精査に基づいて大工活動の実態と近代化への歩みを考察する。
▼A5判・二七〇頁／定価五、七七五円

京都 高瀬川

石田孝喜著

角倉了以・素庵の遺産

高瀬川に限りない愛着と関心を持つて三〇年余り、歴史に埋もれた史料をねばり強く探索し、高瀬川の流れとともに研究を続けてきた著者が、運河開削の歴史をたどり、舟入や橋の変遷など、多方面から歴史と文化のすがたを描く。図版多数。
▼A5判・二五〇頁／定価二、三一〇円

シーボルトが 蒐集したシダ標本

加藤億重著

オランダ国立植物学標本館ライデン大学分館所蔵のシーボルトコレクションのうち、約千点のシダ標本を二〇年にわたり調査した成果。豊富な図版(カラー口絵一四点・モノクロ六〇〇点)とともにまとめる。



標本の状態や残されているメモ・添付ラベルから、採集地・採集者など蒐集の経緯や事情を明らかにする。標本六四二点・一〇〇九カットのカラー画像を収録したDVD付。



【最新刊】

かとう・のぶしげ：一九四一年東京都生。獨協大学教授。

▼A5判・三八八頁／定価七、三三〇円

牧野標本館所蔵の

シーボルトコレクション

加藤億重著

東京都立大学牧野標本館のコレクションを約一〇年間にわたり精査した成果。

▼A5判・二九四頁／定価五、六七〇円

東アジアの本草と

山田慶兒編

博物学の世界 (全2冊)



一八世紀、西洋の大航海時代と植民政策、日本の幕府・諸藩の殖産政策と外国貿易により、日本で遭遇した博物学と本草学。それらにおける知的冒険の展開を、学問・産業・芸術のような分野への影響をも含めて、多角的に考察した21篇。国際日本文化研究センターでの共同研究。

▼A5判・各三七〇頁／各定価七、八七五円

九州の蘭学

越境と交流

ヴォルフガング・ミヒエル／鳥井裕美子／川嘉真人編
人々が西洋近代科学をいかに導入したか、最新研究成果からその足跡を解明。

▼四六判・三八〇頁／定価二、六二五円

飯沼慾齋

飯沼慾齋生誕二百年記念誌編集委員会編

その生涯と学問を、植物学・医学・薬学・化学・人文学など多角的に解明。

▼B5判・五一八頁／定価二二、六〇〇円

絶対透明の探求

尾鍋智子著

遠藤高環著『写法新術』の研究
視覚論の時代状況、加賀藩での知的交流を論じ、遠藤の倫理観・視覚論を解明。

▼A5判・三一〇頁／定価六、〇九〇円

二松学舎大学学術叢書

日本文学の「女性性」

増田裕美子・佐伯順子編 二月刊行予定

紫式部・清少納言……、世界の文学史上に輝く女性作家たち。「王佐日記」にみられる紀貫之の女語り。日本文学に見られる「女性性」は、近代文学ひいては現代のさまざまな文学作品の中にも受け継がれ、物語を紡ぎだしている。日本文学と「女性性」の問題を正面から議論した二松学舎大学東アジア学術総合研究所の共同研究プロジェクトの成果。

第一部 「男性文学」の女性性

三島由紀夫『朱雀家の滅亡』・ジェンダーの観点から少女とロココ

「行人」のお直をめぐって

第二部 女性による表現世界

一葉・ワルフ・デュラス

〈母の涙〉の二重性

松浦理英子論

第三部 新たな展開

一九八〇年代の「少女小説」と女性文化の伝統

少年同士の絆

ライトノベルの方へ

▼A5判・二三〇頁／定価二、四一五円

(市川裕見子)
(平石 典子)
(増田裕美子)

(佐伯 順子)
(菅 聡子)
(大貫 徹)

(杉山 直子)
(藤木 直美)
(目野 由希)

くりやがわはくそん

中国語圏における厨川白村現象

工藤貴正著

隆盛・衰退・回帰と継続

慧星のように現れ大流行しながら、日本ではその死後忘れ去られた厨川白村(一八八〇―一九三三)の著作が、日本でのような評価を受け、大陸・中国の民国文壇の知識人にどう受容されたのかなど、厨川白村を軸とした、日・中・台の文学交流史。

▼A5判・三七八頁／定価六、三〇〇円

一九二〇年代東アジアの文化交流

川本皓嗣・上垣外憲一編

大手前大学比較文化研究叢書6

海外交流が新たな展開を見せた一九二〇年代、西洋という価値は相対的となり、日本の芸術家たちにとって、東洋回帰ももう一つの選択肢となってくる。東アジア文化交流の様相を、当該各国の研究者を結集し、明らかにする。

▼A5判・二三三頁／定価二、九四〇円

言語のあいだを読む

日・英・韓の比較文学

大澤吉博著

東京大学大学院で比較文学を教授し、在職中に急逝した氏の遺稿集。主題は夏目漱石、漱石を中心とした日本文学の翻訳、外から見た日本文学と日本文化、イギリスと世界との関わりなど多彩。

▼A5判・五五〇頁／定価九、四五〇円

幸田露伴の世界

井波律子・井上章一編

小説家・劇作家・随筆家などとして多彩な才能を発揮した幸田露伴。その膨大な作品群は、文学史はもとより、思想史・精神史においても、重要な存在であるにもかかわらず、従来全面的な研究がなされてきたとは言いがたい。

本書は、多彩な執筆陣が、小説や評論はもちろん、都市・遊技・旅行・自然観察・人生論などの著作を通じ、多様な角度から露伴の魅力に迫る。国際日本文化研究センターで行われた共同研究の成果。

【執筆者一覧】

井波律子／池内紀／白幡洋三郎／猪木武徳／細川周平／平松隆岡／佐伯順子／井上章一／鈴木貞美／岩井茂樹／劉建輝(収録順)

▼A5判・三一八頁／定価五、二五〇円



天翔ける白鷗

愚中周及の生涯

見玉修 (映像作家・映像工房サンガ代表) 著

時は南北朝、中国帰りのエリートとして囑望されながら、決して権力におもねらず、ひたすら仏の道を行じ、庶民とともに生きた禅僧がいた。將軍の上洛命令にも従わなかったその僧の名は愚中周及(一三三三―一四〇九)。臨濟宗佛通寺派大本山佛通寺(広島県三原市)や、妙心寺派天寧寺(京都府福知山市)の開山である。



題字・有馬頼底／カバー画・七類堂天谿

▼四六判・三〇〇頁／定価一、六八〇円

情熱の移植医―田中紘一の新たな挑戦―

谷澤忠彦 (弁護士) 著

若き日の「この子をなんとか助けたい」の一念から、生体肝移植術を開発し、確立した移植医・田中紘一。高校時代からの親友がその生き様を熱く綴る。

▼四六判・二六〇頁／定価一、六八〇円



◆入門◆ 奈良絵本・絵巻 石川透著

本書は飛躍的に進められた研究成果をふまえて、思文閣美術館(京都市)で開催された「奈良絵本・絵巻の宇宙展」の図録。元禄年間に京都で活躍した女性絵師の存在を明らかにした作品も収載。御伽草子から王朝物語・軍記物語・歌集・日記・幸若舞曲・仮名草子など広範な奈良絵本・絵巻の世界を簡単な解説とカラー図版で紹介する。



▼B5判・一二六頁／定価二、一〇〇円

奈良博の人氣ボランティアガイドによるスケッチ&エッセイ 奈良 千三百年ものがたり

すずきたみこ著・奈良国立博物館監修

博物館の展示を通して触れた奈良の文化財・歴史の魅力を、奈良国立博物館の人氣ボランティアガイドである著者が、スケッチとともに書き下ろしたエッセイ。

ボランティアならではのいきいきとした語り口で、遷都一三〇〇年に沸く奈良の都にまつわる、とおきのおきのエピソードをご紹介します。

▼四六判・二八〇頁

定価一、六八〇円



美の縁

び

よすが



じんごじきょう
神護寺経とは、京都・高雄・山神護寺に伝来した紺紙金字一切経の

遺巻です。中尊寺経・荒川経とともに平安時代後期の三大紺紙一切経として世に知られています。当時五千四百巻余あったと言われ、膨大な年月をかけて書写されました。

しかし、長い歴史を経て今日に至るまでには、あるいは戦火・水害や虫の被害で、また、古筆切として手鑑などに分蔵するためバラバラにされるなど、次第に散逸するものがあつたことは容易に想像できます。それはもちろん神護寺経に限ったことではなく、悠久の

❖ 神護寺経 ❖

時を受け継がれてきた經典は、本当に貴重なものと言えるでしょう。そんな途方もない旅路を経て、幸運にもほぼ原形を留めているこの神護寺経には、紺紙の表紙に金銀泥で宝相華唐草文、見返しの扉絵には釈迦説法図が描かれ、巻首に「神護寺」朱長方印が捺されています。本文は銀界中に金字にて謹厳・端麗に書写され、紺紙に輝く筆跡は今もなお美しい発色を保ち、院政期の王朝美を今に伝えています。

思文閣墨蹟資料目録

和の美



古書画から
近代美術まで
毎月100点の名品を
通信販売にて
お届けします。

お電話もしくはホームページにてお問い合わせください。

京都市東山区古門前通大和大路東入る元町 555
TEL (075) 531-0001 Fax (075) 531-5533
<http://www.shibunkaku.co.jp/>
info@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵などから學術書全般に至るまで、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております（年4回程度発行）。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。



狂歌山満多山
全三冊

京都市東山区古門前通大和大路東入る元町 357
☎ (075) 752-0005 Fax. (075) 525-7155
<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>
e-mail kosho@shibunkaku.co.jp

思文閣美術館 次回の展覧会

会期 二〇二二年三月二日(火)～四月十日(日)
休館日 月曜日(三月十日)は開館翌日(十日)休館
開館時間 午前10時～午後五時
入館料 一般 500円(550円)
小中学生 300円(350円)
※1日あたり 10名まで入館を料金



雛とミニチュアのお道具展

春の企画展として、好評いただいておりますミニチュア展五回目となる本展では例年の出品に新たなミニチュア作品も加え、より充実した展示構成でミニチュアの魅力を堪能いただけます。お楽しみに！

京都市左京区田中関田町2-7
☎ (075) 751-1777 Fax. (075) 762-6262
<http://www.shibunkaku.co.jp/artm/>
e-mail artm@shibunkaku.co.jp

思文閣会館 ご利用のご案内

思文閣会館では、各種の展示催場・講演会、また会議室としてご利用いただけるスペースをご用意しております。



2F フリースペース
展覧会や講演会など

3F 多目的ホール

会議や勉強会、趣味のお稽古場、ちょっとしたお集まりなど



京都市左京区田中関田町2-7
お問い合わせは左記思文閣美術館まで